

兵庫県将来構想研究会 第11回会議 (2020.9.23) 要旨

【議題】 社会潮流テーマ別検討⑥ 「コミュニティの未来」

(地域コミュニティの作り直しが必要)

- ・ 地域コミュニティの作り直しが必要だ。コミュニティには草刈り等の「手段」の部分と交流等の「目的」の部分があって両方とも必要だが、今後は前者を軽くし、後者を強化すべきだ。
- ・ これからの地域は、地縁型からクラブチーム型に変わっていくだろう。多様な人が多様な関わりを持てるデザインが必要だ。したい、したくないという選択肢もできるようにすべきだ。
- ・ 自治組織は見守りや公認をしているだけでもよい。やりたい人がやりたいことをできるよう支援する体制に変える必要がある。更に今まで貯めてきた地域の資源を搾取しないルールも必要だ。
- ・ 人口減少下の地域づくりは「つくること」ではなく「つぶすこと」から進めるべきだ。ただ全部つぶすのではなく、骨組みを残して新しい活動をしやすい体制に変えていくことが大事だ。

(校区単位の地域自治組織もやがて限界に)

- ・ 校区単位の自治協議会も、このままではおそらく持たない。新たな自治のあり方を考えなければならない。協議会の役割を行政サービスとして位置づける必要があるし、メンバーシップの検討も必要だ。様々な人が関わられるようにすべきだし、第二住民票のような議論もあってよい。

(暮らしを根底から変える完全自動運転)

- ・ 5Gと完全自動運転で、人が生活する空間ごと移動することが可能になる。それでも人はどこかに定着して生きていくのか。動きを止めることはおそらく難しい。住む所と働く所が一つになり、しかも場所に規定されなくなる。好きな場所を転々として暮らす人が増えるだろう。

(地域をインストールする教育が必要)

- ・ だからこそコミュニティに関する教育が大事になる。自分はどの地域に根差しているのか、どの地域に責任を持っているのかがインストールされていないとフリーライダーだらけになる。
- ・ コミュニティに対する素地がないと誰も地域に目を向けなくなる。地域に対する責任やコミュニティの意義を過去から未来までの時間軸の中に位置付けて考えさせる教育が必要だ。

(コミュニティとは価値観を共有する人の集まり)

- ・ 価値観を共有する人たちと作るオンライン上での結びつきが、その人にとってのリアルなコミュニティになっていくだろう。この世界では、複数のコミュニティに所属することによる葛藤や忙しさはなく、自分が様々な選択肢の中からそれを選び取ったという必然性だけがある。

(全県民のITリテラシーの底上げが必要)

- ・ ITに弱い人がいてはいけない。識字教育に近い形でITリテラシーを高める取組を展開すべき。

(文化の正確な継承には意味がない)

- ・ 伝統的なものも元は何かの必要があって作られたシステムだ。祭りの意味などは時代によって変わっていくので、形骸化したものまで正確に継承していくことにはあまり意味がない。受け継いだものをどう表現するかは、次の世代の人たちに委ねられている。
- ・ これからの時代に必要な文化を創るときに、昔の文化が参考になるならそれを使えばよいが、そうでないなら、新しい文化を自ら耕して作るまでだ。文化とはそういうものであるはずだ。

(地域の寛容性が大切)

- ・ 地域の側に求められるのは、今までやってきたものを減らすこと、その上に新しいものを加えたいと思う人たちに寛容であること、そういう人をコミュニティのメンバーとして認め、オンラインで地域の状況をしっかりと共有できること。これらがこれからますます大切になる

(農業を開放する)

- ・ 幾らスマート化が進んでも労働力が足りないのは目に見えている。外国人は臨時ではなく数年単位で雇用する必要がある。地域住民をはじめいろんな人に手伝ってもらい形を作らないと農業自体が持たない。そのために農業者自身がコミュニティを作る努力をする必要がある。

(何のために稼ぐのか)

- ・ なぜ子供を預けてまで共働きをし、必死に働かなければならないのか。こんなに多くのものを市場化してしまってよいのか。お金を払って誰かに楽しませてもらう社会でよいのか。経済活性化を言い続けて私たちの生活は幸せになるかという問いが、今後一層重要になると感じる。

(お金をかけずに暮らせる社会に)

- ・ 時間を金に換え、その金で地域や家族の機能を外部化する。これでは仕事から逃げられない。これからは逆に働く時間をどれぐらい小さくできるかに挑戦する人たちが出てくるだろう。なぜなら、生活の固定費を下げられるので無駄に働かなくてもよいという世界があり得るからだ。
- ・ 結婚式に何百万円も払うのか。気の合う仲間がそれぞれの車（部屋）で集まってきて、乾杯してまた去っていく。そうしたお金のかからない結婚式や葬式をする人が増えていくだろう。

(稼ぐことより楽しく役に立つ活動を)

- ・ 金持ちになって様々なモノを手に入れるのが豊かさだと思う人がいる一方で、金をかけないで生活する、金のために働く時間をできるだけ小さくし、むしろ楽しみながら役に立つことをやりたいという人が増えるだろう。その雰囲気共有できる人同士がオンラインでコミュニティを作り、お気に入りの地域に集まって楽しんでまた去っていく。そのような人たちが出てくる。

(ジョブ型×メンバーシップ型が理想の働き方)

- ・ ジョブ型であり、かつメンバーシップ型でもあるような、双方がネットでつながり、どこで働いていてもいつでも相談でき、サポートしてくれる仲間がいる状態を作る働き方が理想的だ。

(行政の施策は動けない人を起点に置くべき)

- ・ 新しいコミュニティは、やる気と主体性のある人には良いが、そうでない人には少し難しいという、弱者に対してはある種厳しい社会になるのではないか。公的な主体が社会保障に更に真剣に取り組むことは、時代と逆行しているのかもしれないが、かなり大切になる気がする。
- ・ 政策では村にしか暮らせない人を基礎におくべきだ。自由に動ける人に政策を注入することよりも、地方の行政は、まずその地域から動けない人を起点にして政策を立てる必要がある。

(動けない人ではなく動かない人を作りたい)

- ・ 地方で若い人の生業が成り立つなら、「動けない」人ではなく、「動かない」人になる。動けない人に寛容を求めるよりも、動ける人と動かない人が対等な互惠主義の社会を描けないか。

(以上)